

大島塾新聞

ムロノキ新聞社 増刊号

(広告)



浜田ケンサキイカ釣行二〇二一

令和三年七月二十日。前年の好漁に味を占めた我々は、二か月前からこの日の山陰浜田、ケンサキイカ釣行を心待ちにしていた。前日にはすべての準備を済ませ、午前中の仕事を終えての出発予定。正午過ぎ、この日最後の外来患者さんを診察していると木村がやってきた。「待ってるよ、もうすぐ終わるからな」と小声で告げ、やがて診療を終えるとその木村から予期せぬ一言。

今年はずいぶん梅雨明けで数日前から真夏の日々が続いていた。この日も裏山では熊蟬が鳴く暑い日だった。まさか、なんで？こんなにいい天気なの？このところなにかと奈落に落ちることが少なくない我々だが、何度繰り返されてもこのダメージに慣れることはない。落胆した筆者に注がれるナースや秘書のお嬢さんたちの憐れむような視線が痛かった。船頭から「東風が強く船が出せない」という連絡が向根に入り、木村、今回は最後に筆者が奈落に落ちた。



「ええい、ならば萩のシーマートにイカを買いに行こう」と提案すると向根、木村も乗ってきた。翌日も休みを取って何もしないのはもったいない、いや何もしないとはどこまでも滅入ってしまった。というわけで三人は買い物用のクーラーボックスだけを持って山陽道を西に向かって車を走らせた。自宅でやさぐれていた向根はすでに焼酎三合を煽り、中途半端な酔いで頭が痛いらしい。「あの船頭やる気無いんじゃない？」とか「あの船は小さいんで出せないんじゃない？」とか「来年は船を替えて気分も少しずつ晴れてきた。」

車が小郡インターに差し掛かるうとしたところで電話が入った。船頭からである。「夜には風がおさまりそうなので、今からでも来ますか？」と。いったん決まった出船中止が翻ることは通常ありえないのだが結論はすぐに出た、「行きます」。



「行きます」。

「やっぱりね、船がこまいけんちよつとのことを出せんのよ。やっぱ来年は別の船にしよう」奈落の底から一瞬にしてよみがえった私たちだったが、それでもあの船に対する不信心は消えなかった。案の定浜田に到着し湾内を見渡しても海は穏やかだった。

十九時に穏やかな港内を出発したが、伍八波止に近づくころから船の揺れが大きくなった。沖を目指して同じ頃に出港した一回り大きな船が波とうねりで引き返してきたので、恵比寿丸船頭の判断の正当性がその時点でやつと判明した。「うたぐって悪かつたな」という気持ちにはなつたものの、近場でも船が小さいのでそれなりのスリルがあった。やっぱ来年は大きめの船がいいな。



船は約二〇分で釣り場に到着しアンカーを打った。間もなく集魚灯が点灯し「さあお祭りの始まりっ！」と心を躍らせたが今回は違った。ぼつろりぼつろりと釣れはしたが、去年に比べると活性は二〇三〇%。海面は満月に近い月明かりに照らされ、こんな日は集魚灯が効きにくい。そういうえば去年は曇りベースで大雨にも遭ったくらいだったので、集魚灯がよく効いたのだろう。さらにこの日は潮の流れもはっきりしない。船頭も「今日は状況が悪い」と断言した。結局筆者は十数杯、向根も二〇に及ばず、木村に至っては五杯の貧果だった。

その傍らでさすが船頭は大したもの、一・五号のエギを二カ所につけたオモリグ仕掛けで良型のケンサキをコンスタントに釣っていた。木村が「こんな時こそ勉強になりますよ」とつぶやいた。そうだ、筆者も正にそう思う。釣れないから面白くないわけではない。今回は船頭の釣り方をしっかりと観察させもらった。

感度のいいやわらかい専用竿にスピニングリール、おそらく道糸は〇・六号PEライン。オモリグ仕掛けで、オモリは三〇号。下のラインの長さは矢引き、上のエギの枝素は一〇センチくらい。向根の観察によるとイカを二杯釣ることにエギを交換していた。船頭曰く「イカがすぐにエギを見切ってしまうのでこまめに交換してやらないとすぐ釣れなくなる」との

こと。遠くに仕掛けを投げて着底後二、三回しゃくってリールを三、四回転して十、二十秒くらいステイ。これを繰り返して底近く。筆者のウキスツテ仕掛けは後半全く釣れなくなったので、船に捨ててあった仕掛けを拾い、木村のエギを借りて同じようにやってみたら三杯釣れた。活性が高いときは電動リールでウキスツテ仕掛けが楽でいいが、低活性のときにはオモリグのもの、エギは色違いをいくつも用意しておくこと。これが木村の言う「こんな時こそ勉強」来年はきつと活かしてみよう。



この船頭は時々アドバイスをくれるのだが、その言い方がちよつと癪に障るところがあつて「やっぱり次は別の船」と思つていた。しかしさすがにそんな船頭も、船を出す出さないで我々を右往左往させたことにすまない気持ちがあつたのか、なんと最後に彼が釣つたイカを貧果の我々にすべてプレゼントしてくれた。氣をよくした向根が港に戻るや勝手に「来年もまたお願いしまーす」と愛想をふりまいた。そんな訳できつと次もこの船に乗ることだろう。

引き続き  
浜田ケンサキイカ釣行二〇二二

さてそうこうしているうちに一年が経ち、令和四年八月二三日に向根、木村、筆者は三度目の恵比寿丸、ケンサキイカ釣りに出かけた。穏やかな瀬戸内海と違い山陰は風波で出港できないことがしばしばある。我々が最初に予定した七月の釣りは強風で中止となりこの日に至つた。知り合いの何人かも中止や延期を余儀なくされたと聞く。なかなか自然のハードルが高いのが山陰の海である。



なめられとるで、向根

今回も夜が更けてからこそ波は穏やかになつたものの、十八時に出港し五八波止を抜けたあたりから釣り場までの往路は大いに揺れた。向根はもちろん、普段船酔いしない木村も気持ちが悪いと無口になつた。三〇分ほどして馬島沖の釣り場(水深六五m)に着くと弱音を吐いているひまはない。三人ともこの一年間Youtubeや釣りビジョンで学んだオモリグ仕掛けで釣りを開始した。初めのアタリは向根になぜかアオハタで、これは水面で外れてぶかぶか流れ

ていったが、なかなかの良型だった。

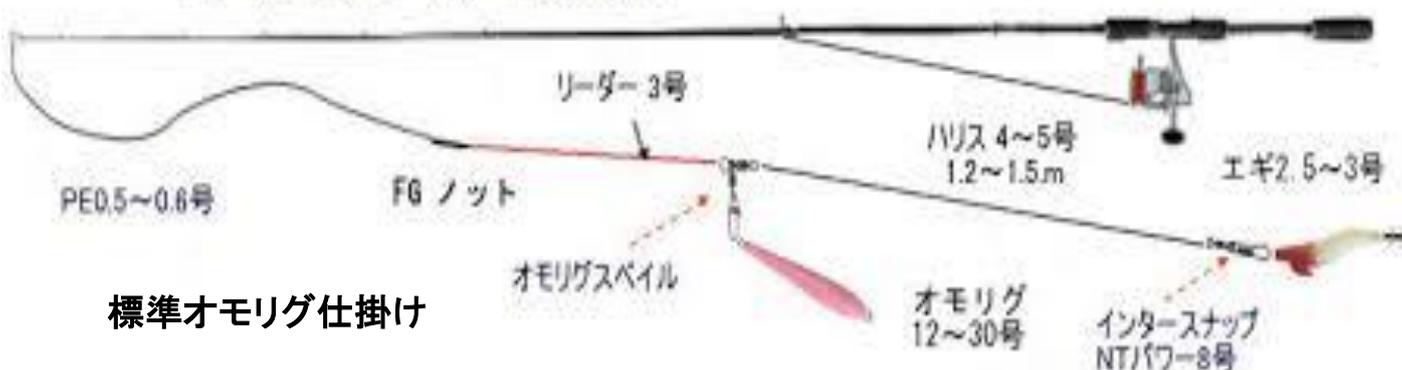
明るいうちはまだイカの活性が低く向根と木村が一、二杯釣り上げただけだったが、十九時半すぎで集魚の灯がともると次第にアタリが開始した。

序盤筆者が遠投で五杯先行、その後は横並びで順調に数を伸ばしていった。貧果だつた昨年と比べると明らかに活性は高かつた。それでもなかなか船頭が竿を出さないのもまだイカが集まりきつていないのかと思いきや、出港前に向根に「酔い止めは飲んだ？」などと軽口をたたいていた船頭、実は気持ち悪くて竿を出さなかつたらしい。口ほどにも無い奴。結局船酔い無傷は筆者だけ、鋼の三半規管とでも呼んでいただこう。

この日は長潮だつたが月は出なかつた。二〇時過ぎて辺りが暗くなると海面はジャコや小鯖トビウオなどが無数に集まり賑やかになつた。それとともにイカのアタリも増えてきて、ようやく船頭もスピニングリール仕様のエギ二本付けオモリグで釣りを始めた。大きくあおつてリールを半回転のジャーク三回繰り返して十秒ほどステイ、これを繰り返していった。筆者はそれをコピーし、筆者の後ろの左舷ミヨシに座つた向根は自作五本枝のウキスツテ仕掛けに変えた。木村は対角線上にいて姿が見えなかつたが、最後までオモリグ仕掛けで通したらしい。

ロッド スピニング 6.7~7フィートオモリグ専用

リール スピニング 2500~3000



標準オモリグ仕掛け

時々振り返ると向根のウキ  
スツテは次々に獲物を捕らえ、こ  
の夜の活性の高さを物語った。あ  
る時など五本スツテすべてに良  
型のケンサキイカが乗ってきて  
竿を大きく曲げていた。

しばらくしてイカの泳層が二  
〇杯くらいまで上がってきたの  
で筆者はイカメタルに変え三〇四  
杯を追加した。するとそこに一匹  
近い大きなシイラが十数匹集  
まってきた。かと思うとそれまで  
賑やかだった小魚がたちまち姿  
を消し、イカも一気に底に潜って  
しまった。ダブルのイカメタル仕  
掛けはオモリとエギ(またはスツ  
テ)の場所を替えるだけでオモリ  
グに流用できるので、とても便利  
である。そのオモリグで底を釣っ  
ていると、二一時すぎには筆者予  
定というか、目標の二〇杯に達し  
たので、そのあとは小さいイカを  
エサにしてアコウかクエが来な  
いかと六〇号オモリの一本針仕  
掛けを落とし込んだ。



胴長37cm今回最大

アタリはあった。船頭はたぶん  
鯛だという。来年は針を大きくし  
て孫針も付けて何とか魚をかけ  
てみたいと思う。海面が賑やかな  
うちにサビキを入れると良型ア  
ジが釣れるかもしれない。いやあ、  
山陰の海は何が起こるかかわから  
ない、ちむどんどんする。

振り返ると向根は先ほどより  
さらにペースを上げて釣りま  
くっている。一匹ずつ上げるのは  
面倒と調子に乗って再度のフル  
ハウスを狙っていると、掛かった  
イカが潮を受けて仕掛けが流さ  
れ船頭の仕掛けに絡んでしまい  
叱られた(木村は釣ったイカを塩  
水水につけていて叱られた。この  
船頭は若いくせに割と怒る)。釣  
れている盛りだったが、もつれた  
仕掛けは修復不能で、上がりまで  
四〇分を残して向根は終了。



向根22:30終了

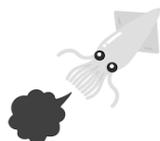
それでも最終的には向根三十  
七杯、木村四十二杯の大漁(向根  
が最後まで釣っていたら軽く五  
〇は超えていただろう)で、みん  
な山陰の夜釣りを満喫した。

昨年の雪辱を期して色々学び  
釣り具屋に行くたび少しずつエ  
ギやスツテが増えていった。学ん  
だのは釣り方と道具だけではな  
い。イカの墨袋を活きているうち  
に抜いておくと帰ってから処理  
が楽になるだけでなく、きれいで  
美味しくいただけるといふ。こ  
の作業をまめに施した向根は、ま  
るで魚屋の売り物のようだった  
と自賛していた。筆者も来年は必  
ずこれをやってみようと思う。



**みよ！見事な処理  
向根印ブランドケンサキイカ**

帰る間際になるといつも船頭  
がいい人に思えてくる。今回も最  
後のほうは打ち解けてイカ以外  
の釣りの話をしたり、実家の自家  
栽培大豆百%の木綿豆腐をくれ  
たりいい感じだった。もしかして  
あの船頭は人見知りする性格な  
のではなからうか。今後長い付き  
合ひになりそうなのがしてきた。  
(福)



gallery



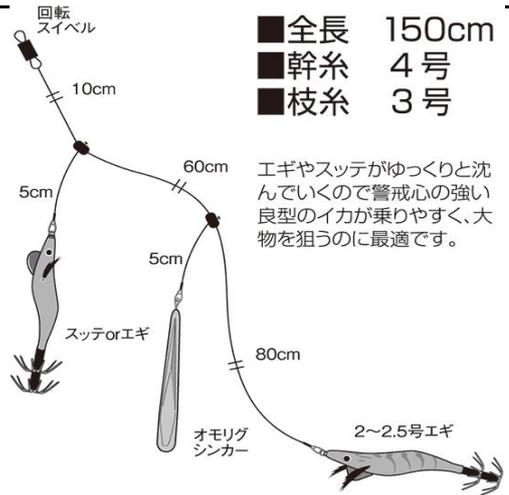
岩国ポイントスタッフ推薦のエギ



木村おすすめフラッシュブースト



船頭のWエギオモリグ仕掛け



ケンサキのにぎり寿司、作ってみた。絶品！

イカをみわけよう！



スルメイカ

ケンサキイカは一見するとヤリイカと見分けがつかないほどよく似ている。大きな違いは触腕の部分で、ヤリイカの触腕は胴長より短いのにに対し、ケンサキイカのそれはより長いのが特徴。

また、並べなければ分かりにくいですが、ヤリイカの方が胴の部分がスリムで正に槍のようだが、ケンサキイカはそれよりもやや太い。スルメイカは形は似ているが色が違うので一目瞭然。

